川崎支部支部長　山岸一雄　（執筆：河合・山岸））

**川崎支部便り　第44号　（2021年09月）**
**オープンで各自が主役：川崎支部**

人生を豊かに（雑学のすすめ）

・甘酒とは、日本に昔から伝わる甘い飲み物のひとつで、米麹と米、または酒粕を原料に作られます。はじめに知っておきたいことは、この2つの甘酒は、作り方も、栄養価も、全く違うということです。

・酒粕で作る甘酒は、酒粕を水で溶いて煮詰めて作ります。一方、米麹で作る甘酒は、米麹に水を加え発酵させて作ります。

・酒粕は甘みが薄いのですが、米麹は発酵時にできるブドウ糖により甘くなるので、砂糖を添加しなくても、しっかりとした甘さを感じます。

・特筆すべきは、その美肌効果です。

麹を発酵させた甘酒には、保湿効果の高いビタミンB群が豊富に含まれているので、美肌の基本となる"うるおい"をサポートしてくれるのがうれしいですね。そのほか、肌への効果としては、甘酒にはコウジ酸が豊富に含まれていることから、美白効果も期待できます。そして、健康効果も抜群です。

・米麹の甘酒は発酵食品なので整腸作用があり、内臓が活性化し代謝アップに役立ちます。また、食物繊維やオリゴ糖も含まれているため、腸の働きを良くして便秘を改善する効果も見込めます。さらに、ダイエット効果が高いことも見逃せません。

川 崎 点 描 ： 川崎支部活動拠点

　【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市⑤】

【読者からの素朴な疑問　その1】

（**質　問**）

　①吉良邸討ち入り時の、江戸市内の警備状況です。

②江戸市中の夜間警備は各町の責任になるので、各町に自身番が警備等の仕事をします。

（時間の告知、火災予防、不審者への警戒等）

③夜間は木戸を出して、出入りが出来ない様にします。（病人は別。翌朝まで開けない）

この木戸は町毎に設置するので、町内は木戸だらけになります。

この中を47人の武装集団が、木戸が無いかの如く容易に本所の吉良邸に辿り着けるのでしょうか。

④翌朝未明に、吉良上野介の首を槍の先に掲げて、高輪の泉岳寺まで行進出来るのでしょうか。

⑤木戸番や自身番が木戸を開放する権利はないので、権利が有る町奉行、老中等の決断が必要ではないでしょうか。

⑥城内に住んでいた吉良を城外に出したのは、柳沢吉保の意図的工作と思います。

（仇討ちのチャンスを与える）

（**筆者からの回答**）

〇江戸の町の「木戸」は表通りに対して、例として間口８間×奥行15間の敷地の中央に１間ほどの通路が有り、表通りには「表店」があり、敷地の中央に１間巾の通路を挟んで、裏長屋が左右に有り、井戸、トイレも共同です。この裏長屋の入口　に「木戸」が有るのが標準的な例です。

　　この標準長屋の多く集合して町が形成され、町の「木戸・木戸番屋」が有ったのです。冬季と夏季出は、町の木戸の開閉が違う「不定時法」ですが、討ち入りは冬ですが、木戸を開ける時間は明け六つ(午前６時頃）、閉めるのは夜四つ（午後10時頃）と考えます。

　〇討ち入り前の集合場所は、竪川沿いの下級武士や庶民が川沿いに住んで居るエリアであり、川沿いの道には「木戸」や「木戸番屋」は無かった？と、思います。

　　江戸時代の古地図でも記述がありません。吉良邸に一番近い集合場所は前原伊助、吉良邸まで約１・１㎞に堀部安兵衛と杉野捨平次の２ケ所も下級武士や庶民達、もちろん商店も有ったと思いますが、川沿いで、木戸の制約は受けにくいと考えます。

木戸の閉まる夜１０時前に集合場所には行けます。

　〇木戸・木戸番屋」も江戸城から墨田川を挟んで江戸城から遠くになるので、管理上、多少甘いのではないかとも考えられます。その理由の一つが、吉良の屋敷替えは江戸城より遠い松坂町で、討ち入りを予想して江戸城より離したと考えます。

　〇引き上げに「両国橋」を渡りませんでした。討ち入り時間の説は多々ありますが、定期便にも書きましたが、

　　①先ほど記した集合場所を出発したのが寅の上刻（午前３時頃）吉良邸が深い眠りに入っている頃。

　　②吉良邸到着午３時15分頃（遠い距離で約1,100m）、この間竪川沿いを行き「木戸」は関係なしで行けたと私は考えます。

　　③即討ち入り開始後、終了午前５前頃（卯の上刻前）約２時間弱。

　　④吉良邸出発　午前５時頃（卯の上刻頃）、鎖帷子着装して、刀・ヤリ等持って、途中休憩もして、泉岳寺まで約12㎞を時速４㎞前後で泉岳寺に向かう。

　　⑤泉岳寺着午前８時頃（辰の正刻頃）

　〇前書きが長くなりましたが　㋑５時頃両国橋を渡ると「木戸や木戸番屋」が開いてない事も有る、㋺吉良の長男が婿入りしている「上杉藩の追って」と出くわすかもしれない、又㋩「下級武士」達の登城時間帯となリ、出くわすかもしれない、（午前８時に江戸城の見附門が開く）

等の理由で、墨田川沿いの木戸も心配無い道を選び、永代橋で渡れば「木戸」も開くしトラブルを

避けたのではないかと思います。

㋥それとトラブルに巻き込まれない早い内に、永代橋に近い浅野家の江戸屋敷のそばを通り、浅野内匠頭はいないが、討ち入りの報告を心でしたと、私は考えます。

〇当然映画等でも竹に書面を挟んで、掲げています。大石はこの「討ち入りの理由書」を持って討ち入りをしています。途中二人が離れて、幕府に討ち入りを報告に行っています。当然書状を持参していると思います。口頭だけの報告ではないはずです。

この先は、海沿いの東海道を品川の泉岳寺に向かったと思います。いずれにしてもアップダウンの比較的無い道乗りで、早く主君に報告をと行軍したと想像します。

では前回の続きです。

浅野内匠頭は現在の東京都港区にある泉岳寺（曹洞宗）に埋設されました。私は泉岳寺から徒歩で約600ｍの高輪台小学校の裏門の前で生を受け、空襲も体験（空襲警報のサイレンが響くと母親がラジオを抱えて電灯を消灯し、前の高輪台小学校の地下に逃げ込みました。逃げる途中、夜空を見上げると探照灯が何本も爆撃機を探し、小学校の地下には数多（あまた）の人がいたことが断片的に今も頭に残っています。終戦の翌年（1946年―昭和21年）に近隣からの火災で自宅を焼失し、父の生まれ育った川崎市に転居しました。母は東京生まれの東京育ちで、疎開先といえば川崎市なので疎開をしなかった様です。私の物心がついてきた頃には、赤穂義士の話は結構聞かされました。

1701年（元禄14年）3月14日（旧暦）、松の大廊下の刃傷事件発生後、赤穂に早駕籠が二度に渡り向かいました。第一の早駕籠は刃傷沙汰のみの伝達で、14日の午後3時半、第二の早駕籠は浅野内匠頭の切腹、赤穂藩の取り潰しの件を伝達するため、14日の夜にそれぞれ出発しました。通常では1週間程度かかるところ、昼夜連続で駆け続けて4日半程度で赤穂に到着したのです。

【謎】（浅野内匠頭切腹から赤穂城開城、幕府への引き渡し）

　藩士総登場で大石を上座に据え、連日対応の議論が行われました。浅野親族の大名家からは穏便に急ぎ開城をとの使者が送られてくるし、藩士達は吉良が処罰なしなので、抗議の為に籠城をする考えの者が多かったと言われています。家老の大石は、内匠頭の弟浅野大学を立てて藩の再興を考えると、籠城は不利になるし、大学に迷惑をかけてしまうと考え、藩内での議論と同時に吉良の処分の嘆願書も幕府に出していました。

　議論の結果を大石が出したのは、赤穂城の前で皆が切腹することでした。切腹の時、自身の思いを述べれば幕府も吉良への処罰を考えてくれるのではないかと考えたと言われています。しかし、大石は、その後切腹を口にしなくなりました。切腹という方針を出したことで、本当に味方する藩士を見極め様としたのではないかと思われています。

　最終的に切腹の結論が出ると、切腹に同意する「起請文」（神文―しんもん）（神仏に呼びかけて、もし自己の言が偽りならば、神仏の罰を受けることを誓約する文書）を60余人が提出しました。議論がすぐ収束しなかったのは、次席家老の大野九郎兵衛等による反対意見もあり、大野は主君の弟の浅野大学が大事で、穏便に赤穂城を幕府に明け渡すのが大切と考えていたからでした。

　切腹の「起請文」（神文）を出すことになり原惣右衛門が、「同心されない方は、この座を立っていただきたい」と発言すると、大野をはじめとする10名が退出しました。原惣右衛門はもしこの時、大野が退出しなかった時には、大野次席家老を討ち果たしているところであったと、後に回想していたそうです。また、この時に江戸から来て参加した片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、田中貞四郎の3人は切腹をしないで、吉良を討つとの旨を述べて退出したそうです。

　赤穂城明け渡しを1701年（元禄14年）4月12日（旧暦）、大石は引渡しを決意し、4月18日（旧暦）に明け渡されました。浅野内匠頭切腹から、約1か月後のことでした。しかし、大石は城明け渡しの際にも、浅野大学によるお家再興を上使（じょうし－江戸幕府から諸大名などに将軍の意（上意）を伝えるために派遣した使者）に嘆願し、上使から江戸に帰り次第、その旨を老中に伝えるとの返答をもらいました。

　そして取り潰しによって家臣達が路頭に迷わない様に、赤穂に残った財産を家臣達に分配する作業に入りました。前記の退職金等々です。江戸高輪の泉岳寺では、1701年（元禄14年）4月12日から3日間、浅野内匠頭の法要が行われました。幕府からの許可が下りたためでした。

【おまけ－赤穂城】

　１本丸　２二之丸　３三之丸　A大手門　B本丸門

　（出典：Yahoo Japan）

【おまけ－木戸】

　①「江戸における木戸・番屋の成立と機能」（波多野　純氏）の論文（国立歴史民俗博物館研究報告　第60集（1995年））を見ると、

　・神田連雀町の木戸は、皮付きの丸太を柱として両側に立て、頂部を同じく丸太の貫でつないだだけの簡単な使用です。

　・河岸地の木戸は、製材された材木を用い、建具が有ります。

　・なぜこの様に異なるのは、設置者の経済力の差が有る様です。河岸地に関わる者は、経済的に豊かなことが影響している様です。

　・山王祭のルートから外れる脇道では、矢板を仮設的に木戸代わりにしています。

　②狭い路地では移動式の柵を木戸代わりにしている場所があり、映画に出る様な立派な木戸が有るのは、大通りや経済基盤が豊かな地域と思います。

　③木戸は、「江戸の安全を確保するために、柱の間に両開きの扉、道路際までの柵や板塀で各町内の入口と出口設置。夜四つ時(午後10時)から朝六つ時(午前6時)までの夜間は閉じられ、木戸番の監視

のもとに，脇の小木戸(またはくぐり戸)からのみしか通行出来なかった。」大型の移動式の柵の様なもの・現代のバリケードの様なものもあったそうです。

　④「古地図で楽しむ江戸・東京講座」（㈱ユーキャン）の冊子で「町の内部（町人地）」、「江戸の町の自治」を見ると、庶民の住環境の長屋構成は表通りに面した表店に挟まれて、表通り寄り少し引っ込んで１間ほどの狭い路地に木戸が有る図表示があります。この木戸の開閉管理は、その長屋の住民が、長屋の木戸の開閉管理をしていた様です。

　⑤いくつかの長屋をまとめて町内として地主や家主（大家）が詰めていた「自身番屋」が有り、町内の警備や事務処理をしていました。現在の集会所の様なところで、消火用の道具や捕り物道具も供えられていたのです。

⑥町の出入り口には木戸があり、夜間は閉じられました。「木戸の開閉をする番人は町で雇用したが、その収入が低く、番屋で日用雑貨を販売しながら副収入にする事が許されていた。」と記されています。

支部の活動

1. 2021.08.28（土）に第4回幹事会(ZOOM形式)を開催し、川崎支部便り製本発行等の活発な意見交換が行われました。

②　コロナり患者急増の為、川崎支部行事は年末頃に延期します。

 ご存じですか

 少年院生活の中で１７才の少年が書いた「なりたい」という詩から、外出自粛の時間の使い方を考えます。

●「なりたい」　　心がこわれるほど 苦しくて やさしい言葉を掛けてくれる人　　捜したけど どこにもいない ふと思う 捜すような人間やめてやさしい言葉を掛けられる そんな人間になりたい。(八街少年院刊『生活詩集 若い木の詩』より)

人生は思い通りになりません。今回の感染症問題もその一つ。外出自粛により私たちの生活環境は一変しました。しかし、その変化に心がついて行けません。その理由は、心が今までの生き方に引きずられているからです。詩の作者は17才の少年。制限された環境の中で自省し、人生を大転換させました。この詩に出会ったのは24年前、体は出家したものの、心が出家しきれず苦しんでいる時でした。詩を読んで大泣きしました。そして救われました。その時から「どんな自分になりたいの」が口癖になりました。生活環境の変化は苦しみを伴います。でも間違いなく人生の好機に出来ると、私は信じています。合掌

人気僧侶大谷徹奘（てつじょう）から。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：k\_yamagishi@6kou.co.jp 山岸宛）